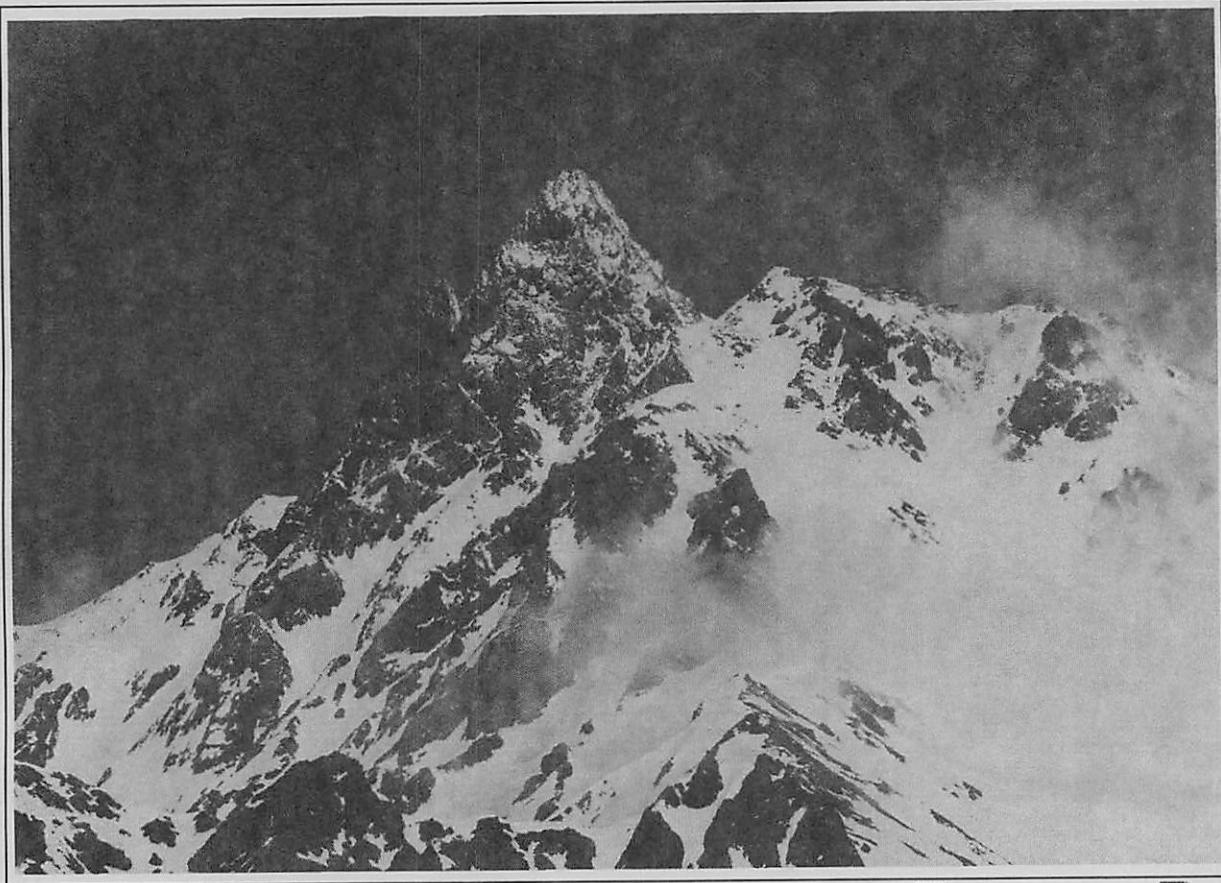


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V60,61号

2006年1~6月



ACC-J茨城

ヒグマ

北海道の山で怖いものといえばヒグマ。初めて北海道登山を計画した時、もっとも不安に思っていた事だった。インターネットでヒグマに関する事を調べれば調べるほどますます怖くなってくる。過去のヒグマによる被害の中でもショッキングなのが、日高の山を縦走中にヒグマに襲われ3人殺された、福岡大パーティー遭難事件だ。この事件の詳細を読んだ時、北海道の山へ行くのは諦めようかと思ったほどだ。

そして2002年の夏、不安のなか日高の沢に入った。クマ対策として必要な熊鈴と笛、そして最終手段の熊よけスプレーを腰ベルトに付け、30メートルおきに笛を吹く。ガサガサと動く物すべてが怖い。なんだエゾシカだったのかと怯える。オショロコマが足元から逃げて行くだけでビックリするくらい五感が研ぎ澄まされていた。稜線はクマの掘り返しだらけで安全な場所はどこにも無い。仕方なしにテントを張り、明日の朝は生きているだろうかと死の恐怖のなか眠る。そして1泊目のキャンプ地である七ツ沼カールに着くと、新しいクマの掘り返しがちこちにあり、精神的に参ってしまったようで、もう泊まる勇気は無くなってしまった。2泊3日を1泊2日に変更しヘッドランプ覚悟で夕方の七ツ沼カールを出発し、夜の登山道を逃げるかのように駆け下った。

数日後、知床半島へ行った。ウトロから知床岬へ行く途中、はじめて海岸を歩くヒグマを見た。そしてここで衝撃的に驚いた事があった。ルシャの番屋にいた漁師に話をすると、さつきすぐ後ろをヒグマが歩いて行ったと話している。この先にある番屋の人もヒグマが人間の近くを歩くのは普通の事のような話しをしている。この周辺にある番屋の人達は、ヒグマに対してあまり意識しない事でうまく共存していた。そして夕方になると残飯をあさりにヒグマが近づいて来た。はじめはこちらが驚いたが、ヒグマは5メートルくらいの距離まで近づき残飯を食べていた。それからヒグマに会うたびに、ヒグマに対しての考え方方がどんどん変わっていった。

3年後の2005年の夏、カヤックで再び知床半島のルシャを訪れた。ルシャ川に上陸してキャンプ地を探していると突然ヒグマが現れた。熊よけスプレーはカヤックの中で今は持っていない。ヒグマはこちらの方をちらちら見ながらカラフトマスを追いかけ一気に近づいて来た。5メートルくらい近寄ってきた所でさすがにヤバイと思い、こっちからヒグマに向かって少し歩いたら離れて行ったのでホッとする。付近の川にはヒグマがいるので、川から少し離れた海岸でタープを張って泊まる。ここ砂浜は

ヒグマの足跡だらけで、他では見られない光景だった。

今までに目撃したヒグマの数は20頭くらいで、離れた所から吼えられた事もあったが、幸い危険な目にあった事は無い。たまたま運が良かったのかもしれないが、実際に経験して思ったのは、ヒグマに対して過剰に恐れすぎていた事だ。ほとんどのヒグマは人間の存在に気付くと逃げて行く。クマは音や匂いに敏感なので、熊鈴や笛で音を鳴らして自分の存在を早めにクマに知らせることが一番重要な事だと感じた。

(笠平 記)

《目次》

2006年冬・春号 1月～6月 ACCJ・茨城

卷頭言—ヒグマー	1
集会報告	4
山行報告	5
戸台川 上ニゴリ沢	7
八ヶ岳 小同心クラック	8
八ヶ岳 天狗尾根	10
湯河原幕岩	11
八ヶ岳 阿弥陀岳北西稜	12
谷川岳 一ノ沢左稜	14
雪上訓練	15
青葉の岩場	16
鹿島槍 東尾根	18
双六岳 山スキー	19
日本オートルート	21
剣岳 源次郎尾根	26
小川山	28
古賀志の岩場	30
奥多摩 巳ノ戸谷	32
三ツ峠	34
青木ヶ原樹海	36
友好山岳団体の月報・会報・その他	40
編集後記	47

* 表紙一槍を望む (Photo by Nakajima)

集会報告

(於：ガスト土浦店)

《次回》

【1月】

1月11日：本図、木村、菊地、吉田、渡辺、松田、坂田、鈴木、木南、西川、
　　笹平、木村（東京）

1月25日：本図、菊地、吉田、渡辺、坂田、笹平

【2月】

2月8日：本図、吉田、渡辺、坂田、鈴木、笹平、西川

2月22日：本図、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、笹平、木南

【3月】

3月8日：本図、菊地、吉田、坂田、鈴木

3月22日：本図、菊地、吉田、渡辺、笹平、鈴木、松田、鯉河、中島

【4月】

4月5日：本図、菊地、吉田、坂田、鈴木、渡辺、笹平

4月19日：本図、菊地、吉田、渡辺、坂田、笹平、鈴木

【5月】

5月10日：本図、菊地、中島、吉田、渡辺、坂田、鈴木、笹平

5月24日：本図、木村、菊地、笹平、鈴木、渡辺、吉田、坂田、木南、（見学1名）

【6月】

6月7日：本図、菊地、笹平、渡辺、吉田、鈴木、坂田

6月21日：本図、吉田、渡辺、笹平、鈴木、菊地、坂田

山行報告

(2006年 1月～6月)

【1月】

12月30～1月1日	八ヶ岳 阿弥陀岳～赤岳 大同心稜	鈴木、名雪、水島
1月9日	戸台川 上ニゴリ	松田、他2名
1月9日	八ヶ岳 小同心クラック	渡辺、坂田

【2月】

2月14～15日	八ヶ岳 天狗尾根	笹平、坂田
2月19日	湯河原幕岩	本団、鈴木、他4名

【3月】

3月4日	八ヶ岳 阿弥陀岳北西稜	渡辺、坂田
3月24日	谷川岳 一ノ沢左稜	笹平、坂田、鈴木

【4月】

4月1～2日	雪上訓練	本団、菊地、吉田、渡辺、 鈴木、笹平、ACCJ-東京3名
4月9日	青葉の岩場	本団、渡辺、鈴木、他1名
4月15日	古賀志の岩場	鈴木、ACCJ-東京4名
4月24～25日	鹿島槍 東尾根	渡辺、坂田
4月29～5月3日	双六岳 山スキー	中島
4月29～5月5日	日本オートルート	笹平、名雪

【5月】

5月3～5日	剣岳 源次郎尾根	本団、渡辺
5月4～6日	小川山	鈴木、木村（東京）、他1名
5月21日	古賀志の岩場	鈴木、ACCJ-東京4名

【6月】

- | | | |
|------|----------|------------------------|
| 6月2日 | 奥多摩 巳ノ戸谷 | 坂田、他1名 |
| 6月3日 | 三ツ峠 | 鈴木、ACCJ-東京4名 |
| 6月4日 | 青木ヶ原樹海 | 本団、吉田、鈴木、
ACCJ-東京3名 |

南ア・戸台川上ニゴリ沢

2006. 1.9

パーティー 松田尚、他2名

前夜発、日帰りのアイスクライミング山行ということで戸台入りした。（広河原泊）戸台からは広い谷底の河原沿いの林道をたどる。砂防ダムなどを越えて約1時間と少しで上ニゴリ沢出合。ここから林の中に入り、上ニゴリ沢を遡る。約40分でガレの斜面の上にF1が現れる。F1は、スーパー林道にかかる氷ばくで、垂直なところも含めかなり開けた氷ばくのゲレンデとなっている。今回も、いつもアイスに行く時と同様、装備がカジタのピッケル+カジタのセミチューブだったので、氷の処理にかなり梃子摺り、右のほうの隅っここの安易なラインを選んで越えた。実力を思い知る。ここを超えたところが林道であり、はるばる来た割にはあまり南アルプスという雰囲気はない。林道からは、同行の人のアズターというバイルを借りてリードしたところ、きわめて安定していて道具の威力を痛感させられた。F2、F3を詰め、F4中段に着いたあたりで日もかげり出したため、引き返した。

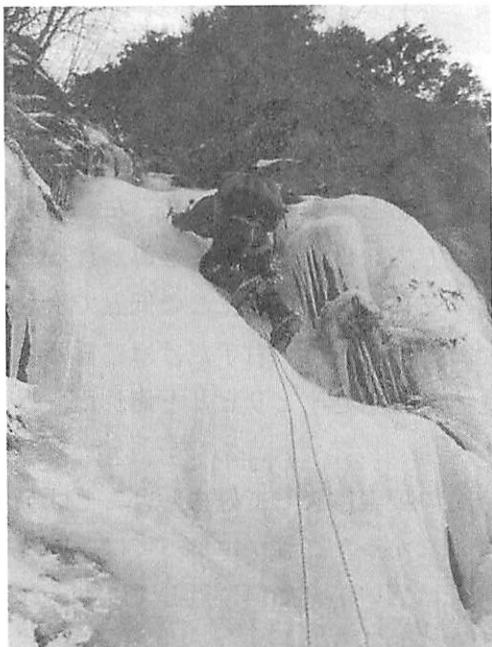
[感想]

広河原は茨城からは遠いのですが、車でのアクセスもよく、ニゴリ沢より上流

には戸台本流側の滝も含め、氷ばくに恵まれているので、泊まって練習するのもいいかもしないと思いました。南アルプスなので、冬型のときでも結構晴れているのも好都合なエリアだと思います。

広河原(7:30頃)→上ニゴリ沢出合(8:40)→F1下・登攀準備→F2下→F3→F4中段(終了点)→F1下→上ニゴリ沢出合→戸台(16:20)

(松田 記)



F2を行く(かかと上がっちゃってますね)

八ヶ岳・小同心クラック

2006. 1.9

パーティー 渡辺聰子、坂田英希

見上げる空に満天の星が輝いていた。
マイナス17℃。美濃戸口の車内でこの
気温だった。

あまりの寒さに寝坊することすら苦痛と
なり、準備に取り掛かかる。結局、この
出来事が緩みがかつてある気持ちを引き
締めてくれた。

未だ明け切らぬ闇にヘッデンを灯す。闇
の向こうにこれから始まる山行への期待
と不安を感じながら。

赤岳鉱泉へと着くころ、空は星空から青
空へと変わっていた。

大同心稜は急激に高度を上げるとともに
息も上がる。とはいえトレースの恩恵に
賜り、なあんにも考えずに右、左、右と
足を出していけばその先へと導かれる。
上昇する体温とは裏腹にこの低温で冷さ
れたピッケルを持つ右手だけは二重の手
袋をもろともせずピリピリと痺れた。

『自分の要素は決して好ましいことばかりではなかった。誰かに解ってほしい時
も無くは無いが、如何に近くともそれは困難であろう。』
そうやって私は幾年月を過していくのか。

樹林帯を抜け眼前に大同心の姿が見える
と俄然、心の高揚を覚える。

大同心から小同心へのトラバースはシ
ーズン初めのギコチなさで我ながら不安を
感じざるを得ない。

それでもまあ、非現実な山岳景観に酔い
しれ、あまりの寒さに痺れていた指の事
を一時は忘れさせてくれる。

『満たされないのも孤独なのも呪うのも、
いつしか自分を責めては納得させてきた
事も、もっと奔放に生きてこれなかつた
ことへの後悔もあるはずだ。でもそれが
道だとうすす感じているから諦めだつ
てする。』

そうやって君は幾年月を過していくのか。

小同心基部からは左上のチムニーへと吸
い込まれていく。

時折、岩に付いた雪が綿毛のようにふわ
ふわと風に乗って飛ばされて行く様が印
象的であった。

好天、微風、コンディションは言う事無
い。唯一一つ、未だに上がらない気温は「寒
い」を通り越して「痛」かった。

指は凍えて痺れるばかり。頬はこわばり
「ビレイ解除」が旨く発音できないほど
だ。

1ピッチ、フォロー

正面フェースから左上でチムニー。凍えた手と体でギコチなく何とか。

2ピッチ、リード

はじめこそ体が硬かったものの、やがて勘を取り戻す。しかしピンが見つからず、やむなくランナウト。緊張する場面。慎重にスタンスを選び、確実に前歯を乗せていく。岩角で支点をとつて一安心。チムニーは徐々に広がっていく。ここは大胆に両手両足を突っ張って体を上げ、突き出たところが小テラス。

3ピッチ、フォロー

左のクラックをいく。少々かぶった岩を抱えて右に行くか左をいくか、このアタリは各々思い描いたムーブでもって痛快に越えていく。

4ピッチ、リード

肩からは草付きをひとのぼりでカシラ。なんてこと無い登りだけど小同心を詰めるピッチは心に余裕を持ってのんびりと。ここからはしばらくコンテで横岳直下。そこから1ピッチで横岳山頂、終了点である。

下山は大同心ルンゼから大同心稜。今まさに登ってきた小同心を眺めながら高度を下げていく。つまりは、誰しも永続的に充たされることは無いのだろう。としても、今の自分はずいぶん充たされているのだろうと思いつる。だからこそ、こうしてツルべで行くことも、登攀を語り合うこともできる。儂いこの一瞬に笑い合える仲間がいる。これが自然である。そうやって幾年月、綿毛のようにふわふわと自分は重ねられていく。

(坂田 記)

八ヶ岳・天狗尾根

2006. 1.14～15

パーティー 笹平孝、坂田英希

八ヶ岳の東面では、天狗尾根の岩峰がとても魅力的に見える。前から一度は行ってみたいと思っていたルートだった。

美しの森駐車場から長い林道歩きがはじまる。出合小屋に荷物を置いて出発。すぐ近くの赤岳沢へ入り、少し進んでから適当な所で左側の斜面に取り付いた。

稜線に出てからは雪と岩稜の尾根を歩いて行く。しばらくすると岩場が現れ始め、簡単な岩場を通過する。次のルンゼ状の草付はロープを出して行く。第二岩壁を過ぎると、大天狗の所で5メートルのちょっとした難所がある。ロープを付け一段上がった所から右下に下る所が少し

怖い。小天狗を過ぎあとは問題なく縦走路へ出た。

縦走路からキレット小屋までは、急なガレ場の長い下り道が続き注意して降りる。キレット小屋周辺は樹林帯になり、少しの間ラッセルしてツルネの頭まで登る。ツルネ東稜を下り、長かった天狗尾根もやっと終わった。

出合小屋に到着し、ビールを飲んで薪ストーブで温まる。翌日の朝は、ゆっくり起きて駐車場へ戻った。

(笹平 記)



小天狗をバックに記念撮影

湯河原 幕岩

2006. 2.19

パーティー 本図一統、鈴木大輔、他4名

長年、前夜発の山行しかしてこなかつた私には、早朝出発は体にきつい感じがしていたが、何回かしているうちにだいぶ馴れてきたようだ。暗いうちに家を出て、土浦から上野駅経由東京駅に7時頃着く。7時20分ころの伊東行きに乗ると、幕岩には9時半ころ着く。6時間くらいの練習しかできないが、痛みの残る膝にはちょうどいい塩梅の時間かもしれない。

私は何をしてもその性格がモロに出てくる。スキーはリフトが動き出してから止まるまで昼飯も食わずに滑ったし、ハンググライダーでも夕方になりサーマル（上昇気流）がなくなっても明るければ飛んだ。とにかく貪欲にガツガツやる方であった。60年も続いた人間の性格なんてそう簡単に変わるものではないだろうが、さすが最近は変わってきたような気がする。特にケガしてから変わったようと思えるのだが、それは足が思うようにゆうこときかないから、そうならざるを得なかったのだろう。一緒に行ったメンバーがガツガツせず、おしゃべりしな

がらマイペースで一日数本のルートをトライするような連中の場合には、私もそれに合わせることに苦痛を感じなくなってきた。それはそれで楽しいのである。

今回は鈴木も同行したので、他の中高年メンバーとは別に彼に合わせて登った。彼は以前の私みたいにガンガン登るタイプである。持って生まれたこの性格の私であるので、この歳になんでもガンガン登ることにも異論はなく、ついついやりすぎたのか膝が痛くなった。

幕岩は、私は不案内であり、すべて鈴木に任せきりだったので何ルートを登ったのか忘れたが、10aくらいのルートを登ったのだと思う。私の今年の目標は、中規模の沢一本と、錫杖岳「注文の多い料理店」と明星山「フリースピリッツ」である。これが消化できれば復帰の見通しがついてくる。目標に向かってトレーニングを頑張ろうと思う。

帰りの電車ではビールを飲みながら帰ったが、これは車山行では味わえない楽しみもある。

(本図 記)

八ヶ岳・阿弥陀岳北西稜

2006. 3.4

パーティー 渡辺聰子、坂田英希

今シーズン3回目の八ヶ岳。いつも
の様に真っ暗な中を歩き出しが、肌に
感じる寒さもずいぶん和らいだよう
な気がした。

北西稜の取付きへと向かうトレー
スは予想に反して薄く、樹林帯の途中
からはラッセル、ラッセル、またラッ
セル。ふかふかの雪を腰ラッセル。苦
痛なはずのラッセルも笑いながらで
きたのは、絵の具で塗ったくったよう
な空と輝く陽光、そしてどこまでも広
がる雪景色のおかげだろうか。ようや
く取付きにたどり着いたのは10時
半、準備をして11時登攀開始。

1P: フォロー

リッジの右斜面を膝まで雪に埋まり
ながら突き進み、あつという間にロー
プがなくなる。

2P: リード

1P 同様ズボズボと進む。すぐにロー
プいっぱいになり、灌木でビレイ。結
構順調とほくほく。

3P: フォロー

岩を右から巻くように行くのだが、今
回は正面突破。うっすらと雪がつもつ
た岩って苦手なんだよねえ。

4P: リード

とりあえず第一岩峰の手前までの数
メートル。ペツルの支点と快適なテラ
スにほっと一息。

5P: フォロー

右に回り込んでのトラバース、すぐに
坂田さんの姿は見えなくなる。妙にロ
ープの進みが遅く、ちょっと不安にな
る。そのうちロープが一杯になり、ほ
どなくコール。岩を回り込んでみると
『階段状の岩で支点も豊富』のはずな
のに、雪に隠れて何にも見えず、ラン
ナーもとれず。常々聞かされていた
「簡単な所でも雪によってはすごく
悪くなる。」という話を思いだす。恐
る恐る足を進め、ようやくビレイ地點
にたどり着く。このピッチフォローで
よかったです!!

6P:リード

第二岩峰の基部までほんの僅か。両側が切れ落ちたリッジにどっかと乗っている雪を落としながら進む。雪が坂田さんの上に落ちて冷たいだろうな、悪いな、と思いつつもどかどか落とす。

7P:フォロー

第二岩峰に右上部を押さえつけられながらのトラバース。左は切れ落ちているため、第二岩峰を抱きかかえるよう横歩き。

8 p : リード

いよいよ最終ピッチ。何がツライって雪が岩の上に鎮座しているので、スタンスはどうなっているかが全然わからない。なんとか一步体を上げると、さらに難関が！スタンスは外形、ホールドなし。怖いよ～～～と言いつつ心を決めてそろそろと進む。雪が無ければ楽チンなんだろうなあ。リングボルトにランナーをとると後はボルトラダー。AOでも行けるが腕力がないのであぶみを出す。最後のガバをつかんで体を上げると目の前に終了点があった。顔を西に向けるとちょうど日が沈まんとしていた時で真っ赤な夕日が空と山を真っ赤に染めて、今まで見たこと無いようなとてもきれいな景色だった。

安全地帯まで2ピッチほどロープをだし、一般道のトレースに合流した時には周囲はすっかり暗くなっていた。携帯で連絡を入れておこうかとチラッと思ったのだが、携帯のバッテリーが赤ランプだったので、そのままにしてしまった。今になって思えば、やはりここで連絡を入れるべきであったと反省しきり。ヘッドランプで阿弥陀岳から行者小屋を進み、美濃戸に着いたときには10時をまわっていた。この日、この天気、この条件での登攀だからこそ為し得た1本、最高の山行だったと思う。

下山連絡が遅れたために皆様に多大な心配をおかけしまして、大変申し訳ありませんでした、ありがとうございました。

(渡辺 記)

谷川岳・一ノ沢左稜

2006. 3.24

パーティー 笹平孝、坂田英希、鈴木大輔

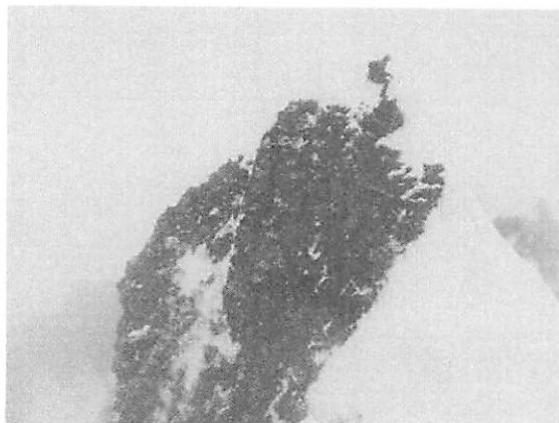
今年は雪が多い。指導センターから先の積雪の多さに驚いた。林道のトラバースになると雪がカチカチなので、あわててピッケルを出して行く。一ノ倉出合までの間、数名の人が引き返して行った。一ノ倉出合に着くと、ガスが濃く視界が悪い状態だった。今回は、東尾根に行く予定だったが、視界が悪いので一ノ沢左稜へ行くことになった。

余計な荷物を非難小屋に置いて出発。デブリを越え一ノ沢をしばらく詰めて左側の支尾根に取り付いた。上部は急斜面になりロープを出してブッシュを登って稜線に出る。トレースがかすかに残っていたので、何も考えず登って行く。急斜面になってきた所で早めにロープを出し

た。視界が悪いので目の前に見えるピークをいくつ越えても、なかなか進まない感じがして嫌になってくる。やがてナイフリッジが続きちょっと怖い。最後は雪に覆われた岩峰を懸垂下降はじりで越えてシンセンのコルに着いた。

コルから一ノ沢を下る。一ノ沢は雪が締まっていて、急な斜面が一直線で下まで続いているので高度感がある。転ぶと下まで止まらない感じがするので反対向きになって慎重に下った。なかなか高度を下げないのでうんざりしてしまう。やがて雪も緩んで普通に下り楽になる。一ノ倉出合に着く頃には視界が良くなりシンセン岩峰が見えた。

(笹平 記)



シンセン岩峰でビレイする笹平リーダー

雪上訓練

2006. 4.1~2

パーティー 本団一統、菊地光夫、笹平孝、吉田 仁、渡辺聰子、鈴木大輔
名雪博二、宮路郁子、木村克之(ACC-J 東京)

毎年訓練とよばれるのは、救助訓練と雪上訓練の2回ある、今回も水戸葵山岳会と合同の訓練となる。前日組と後日組、両日OK、予定に合わせての訓練となつた。

講師は葵の川村指導員にいろいろな指導を受け訓練をした、今回の場所は南会津の小豆温泉の少し先にある斜面を利用した、訓練には格好の場所でした、ACC-Jだけで雪上訓練を行っていたころは恒例で12月の第1か第2の日曜日の富士山と決まっていた、かなり以前は雪も多かったが、ここ数年は雪がなく少し上までいかないと訓練ができない状態であった、

そのため場所をかえ上越、南会津と訓練には最適と思われる。後気がつくことは、会員である以上は訓練たる行事にはなるべく参加のことそれが長く山をやっていられる証かな、帰りに温泉に入ることにしたが小豆温泉は料金が高いので違う所にした、日帰り温泉が人気がありその人たちが利用するものだからサービスが低下が目立つ、特に遂の湯はデラックスしてからは良くない、まだ駒の湯のほうがいいかな・?会津高原駅近くの夢の湯かな、ここはいい温泉です

(菊地 記)

青葉の岩場

2006. 4.9

パーティー 本図一統、渡辺聰子、鈴木大輔、他 1 名

4月はフリークライミングにはいい季節だ。花粉症の人にはちょっとつらいかも知れないが、日差しは暖かく、それでいて暑すぎることはない。今日も朝からよく晴れている。朝、千代田の役所に集合することとしたが、集合時間になっても長森さんがやってこない。どうしたのかと思い、電話してみると、今起きたという。困ったものだが、30分くらいで来れそうということで待つ事にした。青葉はいわきのほうなので、高速を使うことになる。頭数は多い方がよいのだ。役所の入り口に置石があって、よいボルダー課題ができそうなので遊んでいるうちに、長森さんが到着して、出発となった。遅れたのは晩酌が過ぎたという話だった。常磐道を北上する途中、鳩が突然飛んできて、ヘッドライトにぶつかるというインド人もびっくりの事件が起こったものの、混雑もなく2時間はかからずに到着した。後で確認したところ、外見上の傷も見当たらなかったので、ほっとした。路肩の駐車場からちょっと上がりれば、すぐに岩場に出る。短いアプローチはフリークライマーにはありがたい。

青葉の岩場は砂岩でできており、表面はざらざらとして、ところどころに丸いポケットが空いていて、面白いルートを提供している。終了点クリップで終わるルートもあるが、たいていの場合、上に立てるのでマントリングして終了となる。岩登りという視点で見た場合これは当然のことなのだが、インドアクライミングの影響もあって、終了点クリップ=終わりという意識がなくならないようだ。ボルダリングでは最後マントリングして上まで行って終了とするのは暗黙のうちに守られているが、ロープをつけてしまうと本質を忘れてしまうものらしい。フリークライミングにおいて、ロープとは落下防止のためついているのであって、登る行為そのものにはまったく関係がないモノなのだ。だから、ちゃんと岩を登りきって立って終了できるというのは、きわめて自然であり、それができるのはとても幸せなことだと思う。そういう自然なルートは実は結構少ないのである。

登ったルートで鮮明に覚えているものを挙げたい。「シーラカンス」は10dということだったが、わかりやすいライン

とホールドに恵まれ、オンサイトした。途中に岩がはがれたような痕があるので、ホールドが変わっているのかもしれない。

「バラ色のエアメール」はこの岩場の看板課題だ。渡辺さんはひたすらこれに取付いていた。トップロープでトライしたが、11bだけあって、一つ一つのホールドをしっかりと効かせていかなくてはうまくいかない。最後のマントリングが核心らしいが、最後はハングになっていて、けっこうきついのだった。下部をより楽にこなし、パワーを温存する必要があるだろう。「サイドポケット」はほとんどボルダリングの課題である。最初のムーブがすべてで、上部は楽になる。いろんな

やり方があるようだが、デッドでやっていたら指が痛くなつたので結局登れていない。

ということで、帰りに「さはこの湯」へ寄った。ここは相変わらず混みまくつていて、芋洗い状態だ。洗い場も空いてないし、湯船も入る隙間がなかつたりするが、220円と安く近いので定番だ。11月26日に行くと「イイフロ」の日でさらに安くなったと思う。しかし砂岩を登った後はたいてい傷だらけなので、けっこう痛い思いをするのだった。

(鈴木 記)

鹿島槍 東尾根

2006. 4.24~25

パーティー 渡辺聰子、坂田英希

あ～あ、またです。前回はへたっぴいな先行さん&天気に阻まれたのですが、今回は天気です。天気予報は最高によかったんです、出発前もテン場でみた携帯でも。それが晴れるどころか、どんどんどんどん悪くなり、風は強いし視界はないし・・・・。第二岩峰を抜けた後、目の前に広がる色の無い世界。地面と空の区別が全くなく、次に踏み出す足下すら確定できない猛吹雪。すご一く怖かったです。先に進むのは危険、1ピッチ伸ばしきる前に撤退を決めました。今回も頂上をあきらめ下山しようとすると、来たときのトレースがすっかり消えてました。やっとのことてテン場にもどってきたら、立っているのもやつとな強風。体がふきとばされるかと思いました。でも、さすがに4月、吹雪いていても体に感じる寒

さは前回とは全然違いましたね、そんなにツラくはありませんでした。雪の量は今回のが圧勝です。ラッセル、かなりキツかったです。強一い先行さんがいてくれてとても助かりました。先行さん、ありがとうございます！

前に来たところをたどるのは、雪山の場合は結構面白いものですね。前はこんなだったとか、そうそうこうやって登ったなあとか、動きで場面を思い出していました。その割に全体の記憶はあまりはっきりしておらず、全然頼りにならなかたのですが・・・。とりあえず核心の第二岩峰は登ったので次は違うルートから鹿島槍の頂上へ、ってところでしょうか。

(渡辺 記)

双六岳山スキー

2006. 4.29～5.3

パーティ 中島 淳

29日 目を覚ますと外は快晴である。早速軽く朝食をとり出発の準備をする、無料駐車場はまだ連休初日のせいか20台位でガラガラである。

7時出発 新穂高温泉は十数年振りである。バスター・ミナルやその周辺のホテルや旅館もあまり変わっていない様な気がする。変わったのは自分が歳をとつただけなのか、歩き出して10分弱、スキーを背負ったザックが肩に食い込んできた。ターミナルから左俣谷に入り最後のホテルをすぎて5分位で雪がでてきた。スキーをつけて出発。ザックが嘘のように軽くなった。2週間位前雪崩で4人が不明になっている穴毛谷出合をすぎ、左傾斜の雪の林道を進む。片方の足だけが疲れてきた何箇所か小さなデブリもありペースが上がらない。2パーティーに抜かれさらに70歳位のスノーシューのおじさんにも抜かれてしまった。

ワサビ平小屋10時 小屋のお兄さんが雪堀をしていて「今年は雪が多くて大変だ。」とぼやいていた。秩父沢出合の橋の手前から右岸沿いに小池新道に入るとガイドブックにはあるが、右岸の斜面からのデブリと秩父沢からのデブリとでどこ

にルートを取ったらしいか先行パーティーも思い思いのルートを登っている。例年に無い大規模な雪崩がつい最近まで発生していたようである。デブリ帯を早く出たいとは思うのだが足が動いてくれない。結局この通過で体力と時間を費やしてしまった。

大ノマ乗っ越し方面に2パーティー向かっている。よく見ると上部稜線にまだ雪庇が大きく張り出していて怖い。自分は今日は鏡平までと決めているので右側の弓折岳の方に向かう。大変暑く、シールが水を吸い鉛の様にスキーが重くなるので何度もワックスを塗る。

午後4時 目の前に槍、穂高の山々が見えて来た。やっとたどり着いたという感じ。鏡平到着。幕営、夜半すぎからみぞれ。寒くて何度も目を覚ます。

30日 朝9時になっても雨が上がらないそれに視界も悪く動ける状況でない。今日は停滞かなーなんて思っていると、隣のパーティーが出発の準備をしている。声をかけると下山との事。鏡平には自分のテントだけになってしまった。ガスの中静かである。夕方外出すると2張りテントがあった。視界も朝よりは良い

明日は動けそうだ。

1日 6時45分曇り 視界何とか槍が見える。シールをつけて出発する。弓折岳頂上直下はかなりの急斜面であるが雪が腐っていて潜るので何とかスキーを履いたまま登ることが出来た。3名の山スキ一隊と5名のツボ足隊とあい前後しながら双六小屋を目指して進む。弓折岳から先は尾根沿って進み小屋が見えてきたら樅沢岳の斜面をトラバースして双六小屋到着である。

10時 小屋でビールを買い1時間ほど休憩。小屋に荷物を預け小屋の前からモミ沢を滑る。重い雪で疲れるがあつと言う間に標高差で500m下る。登り返しが大変なのでここから双六岳山頂を目指してシール登行開始。10分ほどしか滑らないのに登りは大変。GPSで位置を確認して小屋の右の斜面を登る。視界が悪くなってきて10m先も見えない様になってGPSたよりに登る。登り約1時間半GPSで確認すると双六の頂上を示している。視界ゼロ。シールをはずしGPSで小屋の方向を確認しながら横滑りで下る、しばらくするとガスが切れ小屋が見て来た。斜度はあるが大回りターンと小回りターンで快適に滑る。14時小屋に戻りテントを張る準備を始めると雨が降って来た。しばらく様子を見るが天候はさらに悪くなりカミナリまで鳴り出

た。16時小屋に泊まることにする。面倒くさいので2食付にする。小屋には15人位泊るようである。テント場には1張りあるのみ。8人部屋に単独できた人自分も含め3人山の話で盛り上がる。一晩中雷雨。

2日 朝目を覚ますと相変わらず雨の音がする。朝食を済ませ外に出て様子を観るが雨脚が強い。部屋に戻り待機。同部屋の一人は下山との事。

11時 黒部源流での滑りを諦めて鏡平まで降り、今回の山行の第二の目的である写真を撮ることに決め雨の中下山開始。途中雨が小降りとなり空も幾分明るくなってきた。

12時半鏡平 夕方から急に天候が回復して、穂高の山々や槍ヶ岳、遠く乗鞍まで見えてきた。写真を撮る。夜かなり冷え込み何度も目を覚ます。

3日 快晴。6時40分カリカリの斜面を下りだす。大回りターンで快適に滑り、左俣谷に入ると下部のデブリ帯に登山者が見える。かなりの人数である。雪もざらめになり滑り易い。林道の橋で休憩。

7時20分 あとは林道を雪の付いている所ぎりぎりまでスキーで下る。新穂高温泉着8時50分。黒部五郎や黒部源流を滑れなかつのが残念でした。また行きたいと思います。今度は小屋泊がいいかな。荷を軽くして以上です。（中島 記）

日本オートルート

2006. 4.27~5.7

パーティー 笹平孝、名雪博二(ACC-J 東京)

今年のゴールデンウイークは9連休、装備の軽量化を計ってザック18kg、+スキーとした。

この計画は当初笹平単独で計画されたが、そこえ俺が無理やり割り込んだもので、単独1週間の雪山と、二人で1週間の雪山ではその価値は雲泥の差であろう、割り込んだからには意地でもばてるわけには行かない、より快適にこの山行を進めなければいけない、決死の覚悟で参加したのであった。

4/28

夜自宅出発—沢渡

川の向こうの駐車場に到着笹平を待つ間、新しく出来た大きな足湯でシャンプー、体の汗を流す、さっぱりしたところで冷たいビールで前祝、んまかった。

そうこうしている内に笹平到着一寸乾杯ですぐ寝る。

4/29

沢渡=扇沢=室堂—竜王岳—急なルンゼ下降—御山谷—鬼岳鞍部—獅子岳—ザラ峰 △

早朝沢渡発俺の車をここにデポ、笹平車で扇沢に向かう、アルペンルートに乗る、荷物とスキーを持ってのアルペンル

ートはすべて乗り物(トロリーバス、歩き、ケーブルカー、ロープウェイ、トロリーバス)とは言え決して楽ではない、ザックの上げ下ろし、ダムサイトの歩き、階段での待ち時間、バスの中でザックとスキーを支える体勢と散々疲れきったところで、やっと昼頃室同着、疲労感いっぱいのところでスキー歩行が始まる、太陽が照りつける一の越へ。

荷が重い、ここでどう言う訳か竜王岳に登ってしまう、下りを偵察するがトレースがはっきりしない、これからすぐ近く見える鬼岳を越えたいのだが、北東に落ちている竜王岳の北東ルンゼに入り御山谷に向かう、最初から御山谷へ入るべきだった、ここはすごい傾斜だ、何回か転ぶうちに御山谷に入る、鬼岳手前の鞍部に向かってトレースはある、鞍部からはスキーを背負って歩く、先行に学生の5~6人パーティーがいた、スキーのうまい人はスキーで降りている、俺はスキーが下手なのでずっと歩き、獅子岳を越えると急斜面に出る、雪質が悪い、20センチ下が以上に水っぽく流れやすい、両方のストックを短く持って斜面を向き慎重に降りる、それでも2~3メートルぐら

い2回落ちた、脇を見るとスキーを履いたまま笹平は10メートルぐらい流されて急斜面で固まっている、全部落ちても150~200㍍ぐらい、底は柔らかそうでおけががないとおもう、俺シーラナイッと、そのままザラ峠まで下る、もう午後もいい時間でここでテンパリかな?と笹平が解けて出てくるのを斜面を見ながら待つ。

笹平リーダー解けて峠到着、この後学生5名がやはりスキーをつけて降ってきて、この斜面で固まって夕方薄暗くなるまで降りてこなかつた。

笹平リーダーの決断でやはりここにテンパリ、風が強い。夜中強風雪。△

4/30

一五色が原-鳶山-越中沢岳手前平坦地△

昨夜からの風雪が朝になっても止まず、天気待ち、9時過ぎになってやっと止み出した、遅出となる、だだっ広い五色が原を横断、小屋番から天気を聞き越中沢岳の手前平坦地の端に在る雪庇の脇にブロックを積み立派なテント地を作る、ここまで来ると先行トレースは2名分しかない、夕方学生パーティーが進んで往った、この先は地図上からすると、越中沢岳を越えてしまわないと幕営地を得られないはずだ、この快適テントで又宴会が始まる。△

5/1

-越中沢岳-スゴ乗越-スゴ小屋-間山-北薬師岳-薬師岳-薬師避難小屋-薬師岳山荘-薬師峠-太郎平小屋小屋泊(素泊まり)

早朝テント地発、越中沢岳を越す、昨夜も風が強く時々雪雨が激しかったようだ、昨日夕方先に往った学生たちのテンパリの後がない、ひょっとしてビバーク?おいやだ、下りて学生たちを追い越す、一人相当バテテいるようだ、スゴ乗越小屋で休む、屋根のほんの一部しか見えない。

ここからは薬師を越えるのが大仕事、間山まで相当エネルギーの消耗があつた、間山を越すと風が強くなる、さらにガスって来た、横殴りの風雨、体がどんどん冷えていくのがわかる、先行の2名のうち一人、スキーヤーのほうを吸収する形となった、どこをどう登っているのか、どこを下っているのかさっぱり判らん、G P Sは正しい方向を示しているのだろうがまったく視界はゼロ背負っているスキーが風でおられていつも左に傾く、修正するのに右肩が痛む、無視界の中上り下りを何度も何度も繰り返し、ここがルートなのか不安が募る、いい加減いやになり始めた時G P Sが高度2,920㍍を示す、それから10㍍も歩いた時いきなり2,926㍍の薬師頂上の標識が目の前に現れる、避難小屋跡まで來た

時急にガスが切れ視界が開けた、風は相変わらず強い、が目の前にはなだらかな薬師峠までの斜面が広がっている、寒い、鳥肌が立っている、急いでスキーを履く、一気に降る 10~20 分ぐらいか? 峠まで降りるともうさっきの強風雨がウソのような穏やかな空気の流れになっている、助かった、としみじみとおもう、生きていた、ここからヨレた体に鞭を打ち太郎平小屋へ、艱れ込む様に入った、辛くも生還したのであった。

もちろん、この晩はビールを買い、盛大な大宴会となつたのであります。

5/2

小屋にて停滯 小屋泊(素泊まり)

一日中風雨+濃霧、太郎山まで偵察、ホワイトアウトになりすぐ小屋まで敗退、小屋のおばさんは役所の時同僚だった五十島(いそじま)の親戚で話が弾む。

5/3

—北俣岳手前肩からスキートラバース(北俣岳、赤木岳を越えて)—中俣乗越—黒部五郎岳手前肩からスキートラバース(黒部五郎岳、P1518 を越えて)—黒部五郎小屋—三俣蓮華山頂からスキー トラバース(P2654、双六岳を越えて)
—双六小屋 △

4月29日以来3日ぶりの、大快晴の中小屋を飛び出す、朝からスキーが楽しくなる、太郎山の穏やかな斜面を北俣岳を目指す、一回目のスキー トラバースは

北俣岳手前の緩傾斜から北俣岳と赤木岳を大きく巻く、左に黒部源流の緩やかな流れとすぐ脇に見える赤木平、約30分弱で中俣乗越に着き、振り返ると今滑り出した平坦な尾根ははるか後方と成り、スキーの威力にびっくりする。

二回目のスキー トラバースは、黒部五郎山頂直前の肩、北東に伸びる尾根から、井戸の底のようなカールに向かって一気に落ちる、その後はるか先に見える五郎小屋まで滑りっぱなしの豪快なスキー。

三回目は三俣蓮華山頂から東面のカールに向かって一気に落ちてその後 P2654 の東に伸びる尾根を廻り込み、双六岳の山頂を右に見てトラバースするもので、その後 500 メートルぐらいはゆるい斜面をスキーで歩くようになり、ここも1時間もかからず双六の小屋についてしまう、もうここは都会のど真ん中のようないい人その賑やかなこと、喧騒の世界である、時間も早いので小屋にあがつてビールで乾杯! 極秘のテント地発見、テントで大宴会後寝る。

5/4

—樅沢岳—硫黄乗越—千丈沢乗越—槍の肩—槍沢—ババ平—の俣沢 △

ここからはしっかりとトレースがあり安心だが、樅沢岳の細い雪稜は、ピッケルが欲しい、両手にストックを持ってもどうも頼りにならない、次回はピッケルを持ってこよう。硫黄乗越、千丈乗越

とトレースを追い、いよいよ槍の登りだ、イメージとすると、もっと急斜面を想定していたが意外と斜面も良くスッキリと抜けた、停滞もあって体力的には余裕が生まれたのか？

いよいよ槍沢の降り、もう日も高く雪面も緩んでいる。

随分昔ここをスキーで下る人を見て、相当技術的にすごい人たちと想って憧れの目で見ていたが、今自分がスキーを履いてみると槍沢は斜面も急ではなく誰でも滑ることが出来そうだ、クラストしていやいやだけど、ババ平を過ぎると槍沢ロッジガ有りビールを買い込む、ここから川が出てきてスキーには向かない、いよいよスキーを引っ張って歩き出す頃一の俣沢に出合う、150 ドルほど遡りテンペリ、盛大な焚き火を囲んでの大宴会、で寝る。△

5/5

—横尾—徳沢—明神(金沢レリーフで黙祷)—上高地=バス=沢渡=デポ車=扇沢=大町スーパー泊

今日も大快晴、どこまでスキーが履けるかとがんばって進むが横尾を過ぎていくらも進まずスキーを背負う。

清のレリーフを探すがなかなか見つからない、赤布のつけ方に問題あり、赤布付け替えの必要性を感じる。

喧騒の上高地、山から下りるといつも感じことだが、静かな山からいきなり

喧騒の世界へ降り、なにか気持ちが付いてゆけない、疎外感、と同時に又山に逃げて帰りたい気持ち、又人間はこんな中でなければ、生きてゆけないのか？生きているだけでストレスを感じつつ生きている、そんなたくましさを、人間は皆持っているのだろうか？

大町のスーパーにそれぞれの愛車で着き、飲み放題食い放題の最大級の大宴会を打ち上げ、大満足。車中泊

5/6

笛平と朝分かれて、梅池ゴンドラに乗り終点から一天狗原—白馬乗鞍—梅池駐車場=白馬道の駅

一日天気が良く、白馬乗鞍までシール歩行、スキーで降り、ゴンドラの下で、フキノトウをスーパー袋2つ取る、ビールを買出し、焼肉、刺身、サラダの超豪華版の宴会だ、夕方7時ごろには寝てしまう。

5/7

吾が愛車にて朝帰宅。

夜中の23時30分に起きて、12時調度に出発、ずっと下道をたどり朝の7時30分に我が家にたどり着きました。

今回の山行で4,6kg体重が減りました、夜ラーメン、朝ジフィーズ1食の半分をお茶づけ、昼行動食、と言うことで、典型的な飢餓状態のまま山行を続けました、2日、3日、と続けると、何も入っていないラーメン、水浸しのジフィーズのお茶漬

のうまいことと言ったらすごいもんです。

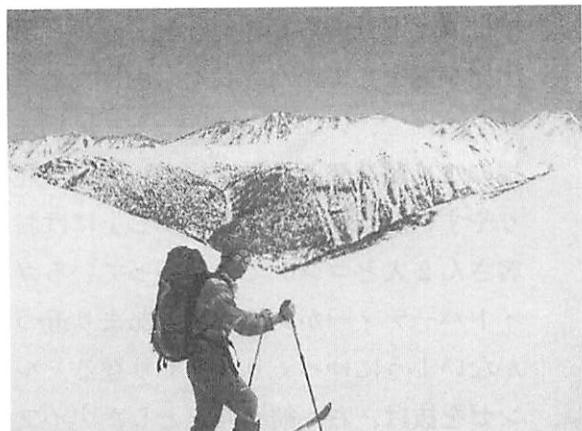
私はこれを、飢餓状態と想っていました、が、笹平リーダーはこれは味覚が研ぎ澄まされた良い状態だと言っていました。

また、ジフィーズを朝食うのは前の晩から雪を溶かした水で作るので火を使わない、ガスを使わない、と言うことです、二人で5泊6日ガスボンベは1個半しか使っていません、ものすごい節約です、今後はその分装備が軽くて済むのです、いやすごいもんです。

教訓、5月の山には、ピッケルアイゼンはしっかりとしたものを持っていくこと、オートルートは薬師の前後、と北俣、野口五郎、双六のトラバース、この二つがコースのハイライト、一番楽しめる処だが、前半の薬師は悪天候に捉り楽しむことが出来なかった、再度チャレンジしたいと思う。

単独をあきらめて付き合ってくれた笹平リーダーに感謝します。

(名雪 記)



黒部五郎カールへ向けて滑降開始

剣岳 源治郎尾根

2006. 5.3~4

パーティー 本団一統、渡辺聰子

3日：快晴

多少寝坊しても構わないはずだったが、太陽の起きろ光線に負けて早々に出発する。一番バスに乗り、ほとんど待ち時間なくスムーズに室堂までくることができた。やっぱりGWの山はいいねえ。雷鳥沢キャンプ場の脇を通って、剣御前小屋まで登り返したところで木崎さんご夫婦に出会う。なんて素敵なお偶然。近況報告等々ひとしきり話に花を咲かせてからまたの再開を約束し彼らは別山へ、我らは剣沢へと向かう。テント場に荷物を置いた後、秘密基地を探しにでかけるが、どんなに探しても見つからず、いつのまにか平蔵谷まで降りてしまった。あきらめてテント場にもどる途中でようやく発見するが、何と基地はすべて雪に埋もれており屋根の一部が僅かに見えていただけだった。なるほどこれじや見つけられないはずだ。例年営業を始めている山小屋も、まだ周囲の雪かきをしている状態だったし、今年はホントに雪が多いんだ、と実感する。あてにしていた秘密基地が使えないのあきらめてテントの設営に取りかかる。笹平さんの教えにならって丁寧に作り上げ、時間をたっぷりかけたが完

成した時点でまだ2時前。することがなくなってしまったので、早々に宴会に突入し、6時にはシュラフにもぐり込んだ。

4日：快晴

3時起床、4時ちょっと前に出発。平蔵谷出合まで一気に高度をさげる。出合ではガイド登山らしきパーティーが2組出発準備をしていた。我々も出合で登攀具をつけて、いよいよスタート。尾根末端のルンゼを登る。雪が締まっていて登りやすいが結構な斜度だ。少し上にはお客様2人とコンテでつながっているガイドパーティーがいるため、あまり近づかないようにゆっくりゆっくり登る。ルンゼを抜け、右へ続くちょとしたナイフリッジを越して雪壁を登ると、Oh! バケツ！見事なトレースにぶち当たった。後はひたすらトレースを追いかけ、気持ちのよい天気の中を稜線散歩。一度も岩に触ることなく9時ごろ頂上に着いた。一息ついた後に下山開始。今回唯一の岩場、カニのヨコバイを降り、平蔵のコルからはシリセード。一気に出合まで滑り降りる。気持ちいいね～、最高！朝、登攀準備をした所まであつという間についてし

また。後は剣沢を登り返してテント場に戻る。まだ昼前だけど、ついさっきまで登っていた源治郎を眺めながら宴会突入。尾根に取付いている人達が見え、あーでもないこーでもないと話に花が咲く。いいね、いいねえ。楽しいねえ。

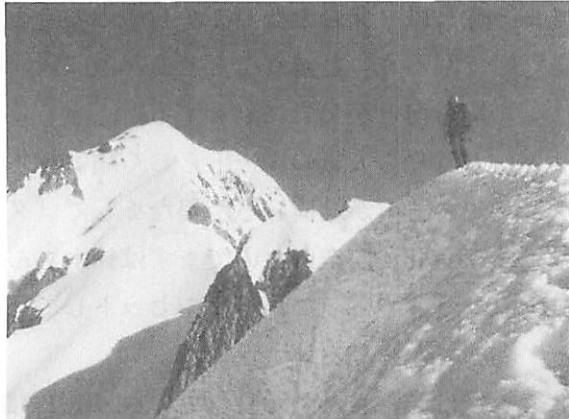
5日：晴れ

晴れてはいるが、天気は下り坂な予感。昨日も早々に寝たので5時にはテントをたたみ出発した。別山乗越からキャンプ場までは当然シリセード。楽ちーん。最後の一登りで室堂へ、その後も順調に乗

り継いで昼過ぎに扇沢へ戻ってきた。扇沢でふきのとうを探る予定だったが、雪がたっぷりでふきのとうの『ふ』の字も見あたらなかった。帰りは念願の鹿教温泉に入り、例の如く一般道で茨城に戻ってきた。早起きは高速料金の得といったところだろうか。

ちなみに、今年のGW、天気がよかつたのは5月の3、4、5だけだったそうである。ラッキー♪

(渡辺 記)



いい天氣です。頂上までもうひとがんばりです。



頂上ついた！気持ちいいねえ。

小川山

2006. 5.4~5

パーティ 鈴木大輔、木村克之、他 1 名

4日の朝、水根沢キャンプ場で目を覚ます。

前日、沢仲間と水根沢を遡行した後、沢屋特有の豪勢な宴会でこたま酒を呑み若干二日酔いの状態で鈴木さんの待つ小川山へと車を走らせる。

ナビの調子が悪く少し道に迷いながらなんとか約束の時間を1時間程すぎ小川山に到着したが予想はしていたもののゴールデンウィークの廻り目平キャンプ場は物凄い混みようで何とか車は止めたけど、いくら探しても鈴木さんのテントは見つからず「ACC-J のテントにアントラーズの旗を目印に立てておく」と鈴木さんに言われたが散々探し回ったがなかなか見つからず、少し昼寝でもしようかと諦めかけた頃に広場のど真ん中でテントを発見して鈴木さんと合流する。

車から一通りの荷物をテントに運びギアチェックを済ませる。まずは今日の予定どおりガマスラブへ向い、いくつかの注意とアドバイスを鈴木さんからもらいビレイをするが慣れない50Mのダブルロープに苦戦し、「ロープ出して、もっと早く！」などと怒鳴られ、自分の登る番

になると「落ちたって大丈夫だから、早く登りなよ！」と5ピッチすべてを鈴木さんにリードしてもらい、少し景色を眺めてから懸垂で下る。

今日の晩飯はペペロンチーノとビールと焼酎少々。

2日目

今日は「父岩を登ってから周辺の岩を見て回ろう」と言うことで少々道に迷いながら何とか父岩に到着する。

どうやら人気のルートらしく順番待ちしている人が結構いるが程なくして「タジヤンⅡ」が空いたのでまずは鈴木さんのリードでトップロープをセットしてもらってから登る。

次は鈴木さんのお目当ての「小川山物語」と「小川山ストリート」を登りました。どちらも「日本100岩場」で★マークが付いているだけあって楽しいルートで次に来る時は是非リードで登ってみたいですね。

昼飯のラーメンを食べた後、おばさん岩の（二階のおばさん）に行き「私がおばさんになっても」などいくつかのルート

を登り今回のクライミングを終えました。
事前にルート集などをいくつか読んだの
だけれど「フリークライミングの聖地」
などと紹介されている小川山は三ツ星ル

ートなどもたくさんあり、何度も通い詰
めたくなるような素敵な岩場でした。

(木村 記)

古賀志の岩場

2006. 5.21

パーティ 本団一統、鈴木大輔、荒井貞幸

古賀志山にクライミングへ行って来ました。メンバーは茨城の鈴木さんと本団さんと東京の荒井の計3名。今回は5.10台のカブリ系を中心にトレーニングという感じでした。今週はずっと天候が悪く前日の夕方辺りには土砂降りになり、当日はクライミングが危ぶまれる感がありましたが朝から快晴で、現地では太陽がまぶしく気温は温めの一日で、ものすごく過しやすい最高のクライミング日和でした。早速ルートに取り付き、鈴木氏はさすが相変わらずの快調さでグイグイ登って行き、ムーブにつながったルートには入魂のハングドックを行い、確実にレッドポイントをものにしていました。本団さんはACCJに入会して今回が初対面の山行でしたが、すごく気さくに接して頂け、指導も丁寧でわかりやすく、人によっては萎縮しモチベーションが下がってしまう傾向がある僕も、今回的一日は最後まで維持出来大変助かりました。クライミングに関しては、聞いていた通り軽やかに登って行く感じで、ラスト近くに登った5.11台の『死亡遊戯』もトップロープながらワンテンで登りきり、登り方がきれいで見ているだけ

でも勉強になりました。目的的には本日の〆（しめ）にリードの練習をさせて頂いたのがいちばん印象深く、つねづね外岩でのリードの経験がものすごく浅くどうにかして練習したいと思っていたところ、ではせつかくなので、練習させて頂こうという事で教えていただいた方法が、トップロープの両末端を折り返して利用するという方法で、それは、両末端共を自分にエイトで結び、片方をトップロープ用として普通に自分用の確保に使い、もう片方を仮想リード用としてクリップしながら、贅沢にも本団氏、鈴木氏の両氏に二人ビレイをして貰い、ルートを登って行くという方法でした。ずっとジムで一人ぼっちで練習てきて、ロープワークにも、全くもってうとい自分には、なるほど！と、目からウロコという感じで外岩ではこんな方法もあるのかとすごく印象深く勉強になりました。本団さんは山だけでなく昔のお話しでもいろいろ”勉強”させて頂きました。なかでも登山家の「キセル」と「モロ」の由来や違い、若いころの山行へ向かう列車の中での車掌との攻防など、映画『北国の帝王』を彷彿とさせる感があり臨場感満

点で（笑）でした！以前名雪さんにも聞いた事があるエピソード（武勇伝？）だったのですが、

今回本図さんからも伺い、昔のクライマーの方達は皆曲者ぞろいだったのだな！というのが実感、確信した気がしました。あと最後に、以前古賀志山がクライマーのマナーの悪さや森林の無断伐採がきっかけでクライミング禁止になった事件があり、それがきっかけで、当日夕方過ぎ地元の方（地主さん関係の方？）が見回り視察に来られ、樹木の伐採痕を見せられいろいろ聞かされました。僕個人、伐採痕は何本か枝的な部分を折ったのだろうと思い想像していたのですが、現場は僕の想像をはるかに越えた酷さで、のこぎりを持ち込んでの乱切りといった感じ

の、惨状と言ってもいいような状態で、本当にやった人間（クライマー）が何を考えて行ったのか理解できない、信じられない光景でした。と、いまだクライマーへの不信感があるからこそその見回りだと思うのにですが、帰りの道中、またまた信じられない事に岩場へのアプローチの道に、コンビニのおにぎりとパンを包装していたビニールゴミを投げ捨てて行った不埒者が居たらしく、たぶんそこを通るのはクライマーだと思われますので、なんともやりきれない気持ちにもなりましたが、自分だけでも、登らせて頂いているという謙虚な気持ちを持ち、つねに、山をきれいに！と心に誓う一日でもありました。

（荒井 記）

奥多摩 巳ノ戸谷

2006. 6.2

パーティ 坂田英希、他 1 名

いつの間にか六月です。

どうやら五月中は気を失っていたようです。

五月といえば沢初め。沢です。沢の季節の始まりです。

それを見逃すとはどうかしておりました。
申し訳ございません。

というわけで今年の沢初めは奥多摩の巳ノ戸谷です。

八丁橋を出発するとすぐに林道は崩落のため車は通行止めです。

日原川上流へのアプローチは大変そうです。

目指す巳ノ戸谷は八丁橋から林道を約15分で、日原川へと下降します。

心配していた下降路はすぐにわかり、遡行開始です。

初めの大滝は右を巻き、シバラク行くとゴルジュ帯となってきます。

ここが忌山の悪場というこの谷の核心です。

と、さも当然のように紹介いたしましたが、「忌山の悪場」一体これをなんと読むのかは解りません。

同行の重藤さんに問われ、適当に答えたものの、「それ、多分違いますね」と不意の一撃。坂田、轟沈いたしました。

さて、その重藤さん。

ACCJ入会前のお試し山行。平日OKというご縁で一緒させていただきました。聞けば筑波大ワンゲル出身で沢登の遡行経験は丹沢、奥多摩、秩父を中心に数多く、その長身痩身はクライマーなら誰でも羨む体躯の持ち主。期待の新人となることでしょう。

唯一、ロープを出す8m滝は左に残置もあり、濺みなく終了。

登れそうなのは登るし、そうでないものは小さく巻く。

左に孫七窪、五平窪が出合いますが、いずれも見上げる滝が魅力的です。

立派な石垣のワサビ田跡を過ぎると二俣となり、遡行は終了。

実にあっけなく、重藤さんは物足りなかったことでしょう。

下山は仕事道を下る手筈で、周到に下調べした甲斐あって、問題なく日原川まで

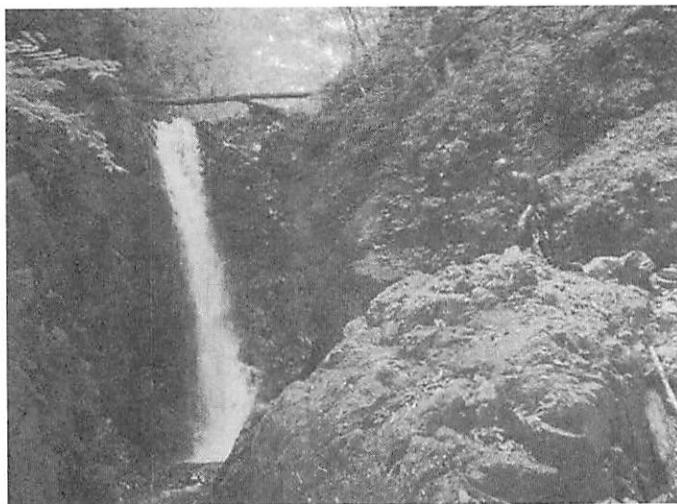
下ることができました。

あとは日原川で釣りをし、焚火をし、一通りノンビリしたらひと登りで日原林道です。

失われた五月の記憶にいくつかのキーワード。

五月雨、パスカルの原理、石々混交。

(坂田 記)



6m滝。もっとありそうだねえ。

三ツ峠

2006. 6.3

パーティ 鈴木大輔、

名雪博二、木村克之、荒井貞幸、荒井郁子(ACC-J 東京)

6月3日三つ峠にて岩トレ。

今回は夏合宿に剣岳での登攀を予定していた為、名雪さんを指導者に、木村さん、茨城から鈴木さん、荒井2名の計5名参加でした。

2日夜に新小平駅に集合し夜半に三つ峠に到着。テントを張りいつもの小宴会となり、しばらくして茨城より鈴木さんが合流。翌3日は曇りで岩場は上の方が霞んで見えない状態でしたが、岩はほとんどぬれておらず、暑くも無く寒くも無くラッキー。晴れていればすぐ近くに富士山がみえるはずでしたが残念なことに霞んで遠くの方まで真っ白でした。

今回は他の4名はだいぶ三つ峠を楽しんでいたようですが、私は一般ルートからクーロワール、権兵衛チムニーに抜けるルートと右フェースの端っこでちょこっと登って終わりでした。というのも朝岩の取り付きまでいって準備をしている時に、シューズを車の中に置いてきたことに気が付いて車まで取りに帰った為。名雪さんには「昔はみんな登山靴で登ったんだからそのまま登っても大丈夫だ」といわれましたが登山靴で登る自信が無か

ったので結局シューズを取りに戻り往復2時間弱くらいのロス。

岩場にもどった時にちょうど木村さん、鈴木さんのペアが（たぶん地蔵ルートかな？）登っていく途中で、トップの木村さんを鈴木さんがビレイしているところでした。

鈴木さんに「もしよければ一緒に」と声をかけてもらったのですが、実際のところ登山道を降りて登って元気ない状態。すぐ名雪さん達も降りてくるだろうと思い下で待つことに。待っている間に他のパーティも上に登っていってしまい、静かになったとりついで横になってしまって縦になってしまっても降りてくる気配なし。もしかして上で何かあったんじや…と思う頃下降。私はそのまま何にもしないのにお昼をたべてからようやく登り始めになりました。

一般ルートから荒井♂トップで名雪さんと私が後からついていく形で登り始めました。

昨年の秋くらいに登った時にはずいぶん怖かった印象でしたが、今回はあまり怖くなく（もちろん1P目でしかもひっぱ

ってもらうわけなのでそんなに怖いはずもない) 今日は大丈夫そう、と 1P 目終了。このままいい調子でと思っていたところクロワールでエライ目にあいました。私のすぐ下から名雪さんが登ってきていたのですが「ブー」という音がした、と思ったとたんに下から吹き上げる風にのって名雪製毒ガスが。息が出来ないので早く登らなきやと追い立てられ 2P 目。権兵衛チムニーは前に登った時、岩の間

にえらいこと挟まってしまい上にも下にも動けなくなった思い出の初チムニーでしたが今回はわりとすんなり登り 3P 目終了。

その後鈴木さん木村さん名雪さんは格好良く中央カンテに登りに行き、荒井 2 名で右フェースでチョコチョコ遊んで次の日の青木が原に向けて下山となりました。

(荒井 記)

ACC-J 的ジャングルリベンジ

『青木ヶ原樹海横断』

2006. 6. 4

パーティ 本図一統、吉田仁、鈴木大輔

名雪博二、荒井貞幸、荒井郁子(ACC-J 東京)

前週5月28日に予定していた『青木ヶ原樹海横断』が天候不良の為中止になってしまったのを、1週延ばし2006年6月4日決行する事になりました。

参加者

リーダー本図氏、

茨城から鈴木氏、吉田氏

東京から名雪氏、荒井♂、荒井♀の合計6名にて。

前日、名雪連合艦隊指令長官のもと三つ峠の岩トレに続き、鳴沢の道の駅にて、テントを張り宴会をしつつ本図さん達を迎えることに…としていたのですが、三つ峠の岩トレの疲労から名雪指令以外は皆ほぼ潰れてしまい僕(荒井♂)名雪指令はテントで、他各人は車内で就寝。

夜中、本図さんと吉田さんが到着、名雪指令だけが迎える事に…m (— —) m 僕もナントカ半潰れ状態ではいられたので本図さんの到着には気付いたのですが、情け無い事に迎える体力までは残存していなかったので…モウロウとし半濁状態だった意識の中で本図さんと名雪指令

の会話を聞いていたところ、

本「みんなは？」

名「いるよ、寝てる。荒井♀は車、♂はテント中…」

本「鈴木は？」

名「帰った」

本「へっ!? 帰ったあ？！」

名「うん、帰った…」

本「なんで？」

名「明日…沢なんで、とか言ってたなあ…」「駅まで送ってた…」

本「…帰った…」

(かなりの間)

本「あれ、鈴木の車じゃないのか！？」

(たぶん鈴木氏の車を指差しつつ)

名「そう…鈴木君の車あ」

本「…そうだよなあ…??!!」

名「あっ! 帰ったの木村君だあ…」

そうです、名雪指令もたぶん疲れてて、かなりモウロウとしていたらしく、本図さんとすっとんきような会話になってしまったのでありました。一部始終を聞いていた僕は氣力限界にもかかわらず思わ

テントの中で笑いが込み上げて来て、一気に眠気がふつ飛びそうになりましたが、軟弱な為眠気に負けました。その後問題（？）解決後皆完全に就寝に入り、翌日。

天気は、ほぼ快晴、早朝道の駅から車2台に分乗し、1台を今回の樹海歩き最終目的出口付近の場所に止め置きして、もう1台に全員で便乗しなおし樹海への進入口目的地へ向かいました。

今回は場所が場所でもあるので、突入に際し、まず各自の装備の確認と、今回の目的のひとつであるコンパスの使い方と地図の見方の確認を念入りに行いました。が、そのコンパスの使い方のレクチャーの際地図の上にコンパスを置きながら…本図さんが…「何度確かめてもコンパスの北と地図の北が合わねえ～んだよ～！」と、ぶつぶつ言いながら僕の方へ來たので、なんだろうと確認してみたら…、地図自体を北方向に合わせているわけでは無い状態で、コンパスを地図の上に置き磁北線を合わせ見比べていたので、僕が、失礼かなと思いつつ…も、「地図をちゃんと北方向に合わせてから見たら良いんじゃないでしょうか？…」と、進言（^__^;ゞ

本図さんも、「あっりや～！ボケてたあ～北を合わせないで揃うわけ無いよなあ～ははは」というおちやめな一幕もありつつ。それから、あと、樹海内でG P Sが

どれだけ使えるのかを確かめる為、名雪長官が事前に今回のルート等をインプットして来た自身愛用のG P Sを持参し、それらも再確認し、いざ出陣！となりました。

割と天気が良かった為か入ってみると樹海は世間で思われているような怪しい感じでは無く、自分的には、思っていたように結構きれいな感じだよなという印象でした。

しかしすでにこの時点で撮った写真にはオーブらしきものが写ってたりしましたが…；

皆一様にコンパスを持つつ慎重に歩き始め、ある程度何分か歩いていると、慎重すぎていた為か、緊張の為か、全員がほとんどダマ（かたまり）になる感じで歩いていたので、本図さんの「これじや、訓練にならんからみんなある程度はバラケようよ！」のひと声で緊張がほぐれた感じになり散開して歩くようになりました。

それからその状態で1時間ほど歩いていた午前9時21分頃に、まず第1回目のとんでもない発見をしてしまい、一同青ざめる事になってしまいました！

僕が一番しんがりに居つつ、景色がかなり樹海の中でも山の掛け上がりらしい地形になったのをきっかけに、そこを登っているみんなの写真を撮り、そのあと前方を行く鈴木氏、吉田氏がいい感じで山

登りっぽく、絵になっていたので、デジカメにて動画を撮影し始めたら、その吉田氏が突然、「ここ、なんかおかしい…ここ、なんか変だよ！…」とつぶやき始め、丘を登り切った時点で、周りを見まわしながら、「ここ、やっぱりおかしい、気持ち悪いよ…」と語り始め、その光景を僕は撮りつつ【なんかドキュメンタリー映像の撮影みたいだなあと内心思いつつ】なかば、興味津々で撮影していたら、名雪長官が「赤いジャンパー発見～！」と一声！その言い終わったちよっと後に、「うわ～あ、いやなもの見つけちゃったあ～！」と、この土地では有名な”自〇体”の一体目を発見！「や、やっぱり…！」と吉田さん。散開していた皆がまた一時集合する事態になり、一同一様に「やっぱり噂だけじゃなく本当に出るんだね～（いるんだね）ここって…」と、一瞬にして重い空気になりブルーになってしまいました。

このまま消沈している訳にもいかないので、周囲の状況を検分し、現在の場所をなるべく詳しく地図に記入する事にしました。

ひとつ残念な事にこの地点では樹林帯の育成が濃く上空が開けていなかった為か、名雪長官のG P Sが衛星ロスト状態でうまく効かなく詳細な方位の確認が取れませんでした。その後皆で合掌し、今回のルートの中間点辺りまで暫く歩いたのち

軽く食事がてら小休止をして、気分を変えようと話をしたりもしたのですが、先程の、件が件の為か、なかなか重い空気は拭い切れずでした。

問題はそのあとで、その会話の時に冗談で、「1時間で3分の1の行程を進んでる計算で1体見つけちゃってる計算ですから…」「この後また1時間に1体で残り3体見つけてしまう計算にはなりませんよね～…(^_^;)」と話していたら、再出発した、ほぼ1時間後に…散開しつつ歩いていたら、荒井♀が僕（荒井♂）の左少し前を指差し、「あそこにまた遺留品の靴がある～う…」と言ったので、近くにいた僕がその方向を覗いてみたら…、ちょうどその場所はある程度ひらけていて大きな木の根が股のようになっており、木洩れ日の光が差し込み、偶然辺りが照明のスポットライトでライトアップされた舞台のような場所になっていて、大腿骨とおぼしき物体が真っ白く照らされ、まるで生えているかのように、によつきりとまる見えで…

思わずみんなに向けて、「また、見つけてしまいましたあ…」「大腿骨です…あれは…たぶん…間違いなく…」とシャレにならない事態が起きましたでした。

また全員でその場所を検分するべく状況を確認してみたら、今回の場合はどうやら動物にやられてしまった後らしく、無

残にも全体がそこらじゅうにバラバラに散らばってしまっていたので、皆で体全身の部分を探す感じになってしましました。

今度の場合は周囲も日が差し込んでいるくらいで割と見通しが良かったくらいなので、G P S も問題なく作動し正確な方位を割り出す事が出来、ルート図にポイントを書き込みして、ここでもまた皆で合掌し再出発することにしました。

冗談が冗談にならなかつたばかりなので、重さに拍車が掛かった感がありましたが、残り約1時間の行程自分達が”ああなる訳にもいかない”のでとにかく進み続けました。

終盤になるにつれ周囲に梱包用のビニール紐を貼りめぐらした、まるで蜘蛛の巣のような物がたくさん現れはじめたり、警察の自殺を踏み止どめさせる為の掲示板などが貼ってあつたりで、{ああ、これが搜索の跡なんだなあ～…}とよけい不気味さを煽ってくれるような場面に出くわし、益々、空気が重たくなって行くのでした…。

幸いというか何というか…^_~； その

後はもう現れず、

無事（？）終了ポイントにたどり着き、ひと息ついたのち、皆に塩をかけ、供養をする意味も込め、厄払いをしておこうと神社にお参りをしに行く事にして【富士浅間神社】へ向かいました。神社ではお参りやお神酒を頂いたりで厄払いを行い、少し見学をしたのち解散という事になりました。

追伸

最後に東京組は、帰路途中の『タイガー食堂』というところで美味しい手打ちうどんを食べて帰りました。ここのうどんはほんとーに、んまかったです！正直ここに来てやっとひと息つけた気分でした。

以上！

(荒井 記)

《友好山岳団体の月報・会報・その他》

ありがとうございました

——月報——

◎ろうまん山房通信 NO.25 2006.1 B5 14P Rohman Sanbow

丸沼高原スキー場～白根山～座禅山のコル～丸沼高原スキー場、会津・翼沢山ほか

◎ろうまん山房通信 NO.26 2006.2 B5 14P Rohman Sanbow

安達太良・沼尻スキー場、船明神山、那須・鎌房山、南会津・只見町長浜周辺ほか

◎ろうまん山房通信 NO.27 2006.3 B5 P Rohman Sanbow

伊豆・ツゲ峠、猫越岳、那須・高原山、栗駒山 OB スキー山行ほか

◎ろうまん山房通信 NO.28 2006.4 B5 P Rohman Sanbow

宮城蔵王・不忘山、奥利根・雨ヶ立山ほか

◎まほろば NO.23 2006.1 B5 16P まほろば山岳会

南会津・桧枝岐～御池～広沢田代～熊沢田代～燧ヶ岳、足尾・塔の沢登山口～袈裟丸山～折場、奥秩父・笛吹川東沢偵察、尾瀬・戸倉スキー場～荷鞍山ほか

◎まほろば NO.24 2006.2 B5 12P まほろば山岳会

市岳連雪上訓練、尾瀬・岩鞍スキー場～西山～笠ヶ岳、那須・二岐山ほか

◎まほろば NO.25 2006.3 B5 10P まほろば山岳会

西根川小白沢左岸尾根～大沢高森山～1207m～西根川の橋～川衣、奥多摩・鴨沢～雲取山、上州武尊牧場スキー場～武尊田代～武尊山、那須岳積雪期登山講習会ほか

◎まほろば NO.26 2006.4 B5 8P まほろば山岳会

南会津・葭ヶ平～村界尾根～三ツ岩岳、上州・玉原ダム～尼ヶ禿山～玉原湿原ほか

◎まほろば NO.27 2006.5 B5 22P まほろば山岳会

黒谷林道～火奴山～丸山岳～メルガ股沢左岸尾根～村杉岳～奥只見ダム、奥只見ダム～林道～倉前沢山～三羽折ノ高手BC、BC～三羽折沢左岸尾根～メルガ股沢～三羽折沢右岸尾根～BC、BC～村杉岳～倉前沢山～BC、城ヶ崎海岸岩トレ、武尊牧場スキー場～避難小屋、五味沢～ムジナ沢右岸尾根～浅草岳、上越・板幽沢左岸尾根～雨ヶ立山～布引山～右岸尾根、南ア・夜叉神峠ほか

◎まほろば NO.28 2006.6 B5 12P まほろば山岳会

番屋川林道～番屋川～1380m鞍部～荒海山、館岩川戸坪沢、番屋川戸倉沢～1230m鞍部～黒峠山ほか

- ◎まほろば NO.29 2006.7 B5 8P まほろば山岳会
南会津・桧枝岐川巽沢左俣左沢～家向山の肩～登山道下降、ナンガパルパット遠征隊
高所トレーニング・富士山、上州武尊山～鹿俣沢～獅子ヶ鼻山～鹿俣沢ほか
- ◎まほろば NO.30 2006.8 B5 12P まほろば山岳会
パキスタン・ディアミール谷トレッキング、埼玉岳連遭難対策訓練、奥利根・楮俣川
日崎沢ほか
- ◎わらじ NO.599 2006.2 B5 16P わらじの仲間
朝日連峰・大井沢～天狗小屋～障子ヶ岳～大井沢、赤見堂山、北ア・葛温泉～ブナ立
尾根～水晶岳～姿見平～黒部川横断～薬師岳中央稜～太郎平小屋～寺地山～神岡新道
～打保ほか
- ◎わらじ NO.600 2006.3 B5 10P わらじの仲間
奥武蔵・ハイキング、正丸峠～丸山、北ア・梅池スキー場～小蓮華岳～白馬岳～大雪
渓～岩岳スキー場、谷川・土合～赤沢山～丸山越～白毛門～土合ほか
- ◎わらじ NO.601 2006.4 B5 24P わらじの仲間
谷川温泉～二俣～中ゴ一尾根～オジカの頭～谷川岳～天神尾根、谷川温泉～二俣～幕
岩尾根～俎嵐山稜～オジカの頭、天神平、北ア・笠ヶ岳第二尾根、越後・三ツ石尾根
～巻機山、飯豊・二王子岳～門内岳～飯豊川～飯豊本山～三国岳～川入ほか
- ◎わらじ NO.602 2006.5 B5 8P わらじの仲間
北ア・大谷原～北俣本谷、会越・沼ノ平～猿楽～浅草岳～平石山～入叶津、鎌倉山と
秘湯めぐりほか
- ◎わらじ NO.603 2006.6 B5 20P わらじの仲間
越後・駒ヶ岳～中ノ岳、北ア、大谷原～鎌尾根取付追悼山行、上信越・かぐらスキー
場～苗場山、雁ヶ峰～スキー場、会越・五味沢～ムジナ沢～浅草岳～早坂尾根～五味
沢、遅沢左岸尾根、尾瀬・鳩待峠～ワル沢の頭～至仏山～ワル沢滑降～鳩待峠、八方
尾根～唐松岳、富士山ほか
- ◎わらじ NO.604 2006.7 B5 16P わらじの仲間
男鹿山塊・大蛇尾川西俣、東俣、日留賀岳、毛猛・大白沢～太郎助山～毛猛山、八甲
田・酸ヶ湯～下毛無岱～上毛無岱、会越・丸山スキー場～未丈ヶ岳～毛猛山～浅草岳
～中ノ又山～裏ノ山～三川分水峰～矢筈岳～三峰ガリ一～栗ヶ岳ほか
- ◎わらじ NO.605 2006.8 B5 8P わらじの仲間
南ア・大井川日影沢、湯檜曽川・抱返り沢ほか

◎わらじ NO. 606 2006. 9 B5 22P わらじの仲間

飯豊・胎内川東沢本源沢、実川下追流沢～三国山～川入、滝川赤石沢、飯豊縦走、谷川・阿部能岳北東尾根、丹沢・水無川河口～塔ノ岳ほか

◎さわぐるみ NO. 35 2006. 2. 3 A4 20P グループ沢胡桃

富士雪上訓練、岩鞍スキー場～武尊田代、八幡平・後生掛スキー親睦、奥多摩・川苔山、八ツ・ピラタスロープウェイ～横岳～縞枯山～茶臼山、ピラタスロープウェイ～縞枯山～麦草峠～白駒池～中山峠～渋の湯、雪山レスキー・土樽付近、南会津・大嵐山、丹沢・大山川ほか

◎さわぐるみ NO. 36 2006. 4. 5 A4 16P グループ沢胡桃

奥利根・布引山、奥多摩・入川谷本谷、南会津・小沢山～山毛櫟沢山、丹沢・四十八瀬川勘七沢、確保訓練・丹沢南沢、丹沢・玄倉川モチコシ沢、上信越・裏岩菅山、奥多摩・鶴川大群沢、レスキー訓練・丹波川、安達太良・箕輪山、奥多摩・日原川唐松谷、尾瀬・白尾山～八木沢～マサヨシ沢ほか

◎さわぐるみ NO. 37 2006. 6 A4 28P グループ沢胡桃

夏合宿・台高3本、奥多摩・鴨沢～雲取山、那須・甲子山、奥多摩・シダクラ沢、巳ノ戸谷、山菜・大源太山ほか

◎さわぐるみ NO. 38 2006. 7 A4 22P グループ沢胡桃

足尾・松木川カマノ沢左俣、南会津・桧枝岐川安越又川、奥秩父・滝川ブドウ沢、徒渉訓練・魚野川本流、八幡平・小和瀬川中ノ又沢スズノマタ沢、朝日・藤沢川～女川白沢～牛股沢、那須・苦土川湯川峠沢ほか

◎さわぐるみ NO. 39 2006. 8 A4 16P グループ沢胡桃

御坂・芦川濁沢、神室・大横川本谷左俣、江合川軍沢川、谷川・登川丸ノ沢本谷、朝日・荒川角楳沢下ノ沢ほか

◎Next ! NO. 121 2006. 1 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

楳俣川支流矢種沢ほか

◎Next ! NO. 122 2006. 2 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

奥多摩・つづら岩岩トレほか

◎Next ! NO. 123 2006. 3 B5 11P 山岳溪流釣り集団むげん

奥多摩・つづら岩岩トレほか

◎Next ! NO. 124 2006. 4 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

伊豆市・野喰屋いかばた、ほか

◎Next! NO. 125 2006. 5 B5 10P 山岳渓流釣り集団むげん

奥秩父・滝川ほか

◎Next! NO. 126 2006. 6 B5 14P 山岳渓流釣り集団むげん

奥秩父・泉水谷大黒茂谷、丹沢・小川谷廊下ほか

◎Next! NO. 127 2006. 7 B5 14P 山岳渓流釣り集団むげん

奥秩父・丹波川小常木谷ほか

◎Next! NO. 128 2006. 8 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん

奥只見・袖沢ほか

◎とまのかぜ NO. 159 2006. 2 B5 56P 童人トマの風

1月の会山行・二口山塊6パーティ、櫛形山脈、南ア・赤石岳～荒川三山、八幡平山スキー、越後・大湯～池ノ塔、八甲田・南西沢ルート～銅像ルート、北ア・爺が岳東尾根～南尾根、荒船山周辺の氷瀑、白根三山縦走、南ア・聖岳、草津・芳ヶ平山スキー、天神平～谷川岳、北日高・沙流岳 オダッッシュ山 山スキー、越後・アラチ沢右稜、上信越・湯ノ丸山ほか

◎とまのかぜ NO. 160 2006. 3 B5 40P 童人トマの風

南会津・博士山、南ア・奥茶臼山、裏妙義・裏谷急沢、北海道・たけのこ山、南ア・会津駒ヶ岳、頸城・カネコロン見物、黒姫山、五地蔵山、越後・水無尾根～金城山～長崎尾根、金城山北尾根、北ア・白鳥山山スキー、ハツ・南沢大滝、アイスクライミング事故報告ほか

◎とまのかぜ NO. 161 2006. 4 B5 48P 童人トマの風

3月会山行・白毛門と宝川周辺のスキー・7パーティ、伊豆・城ヶ崎フリークライミング、

ハツ・赤岳天狗尾根、北ア・遠見尾根、北信・飯縄山山スキー、金北山ドンデン山、越後・郡界尾根～池ノ塔尾根、越後・十字峠～銅倉尾根、北信・佐渡山、乙妻山東斜面、出羽三山・湯殿山、佐久・湯川ほか

◎とまのかぜ NO. 162 2006. 5 B5 30P 童人トマの風

北ア・二股～小日向山山スキー、谷川・平標山沢山山スキー、上越・目白山～タカマタギ、頸城・大渚山、金山、三田原山、笛ヶ峰牧場～火打山山スキー、ハツ・阿弥陀岳南稜、谷川・西黒沢滑降、北信・温井集落～鍋倉山ほか

◎とまのかぜ NO. 163 2006. 6 B5 70P 童人トマの風

日高・カムイ岳～ペテガリ岳、芽室岳、利尻山東北稜、南稜1200まで、増毛山塊・

群別岳・頸城・シャルマンスキー場～空沢山、月山、東北・鳥海山・湯の台山、法体
滝口、小川山フリー、北ア・柳又谷源頭～杓子沢山スキー、白馬岳～日本海スキー、
薬師岳山スキー、奥利根・巻機山～利根横断～丹後山、奥秩父・滝川本流～慎ノ沢～
八百谷～金山沢、銀山川山菜、遭難対策訓練・天覧山、北海道報告 10 数本ほか

◎とまのかぜ NO. 164 2006. 7 B5 30P 童人トマの風

6月の会山行・南会津・長須ヶ玉山周辺の沢 7 パーティ、只見・伊南川小川沢右俣～
左俣、越後・小黒川本沢～上権現堂山、丹沢・新茅ノ沢ほか

◎とまのかぜ NO. 165 2006. 8 B5 42P 童人トマの風

徒渉訓練・丹波川、奥秩父・笛吹川鶴冠谷右俣、西ノナメ沢、那須・阿武隈川南沢、
中ア・伊奈川・越百川、焼石岳・スギヤチ沢、毛猛・羽根川キンカ沢～黒又川高倉沢、
吾妻・大滝沢カモシカ沢、上信越・毒水沢、丹波・一ノ瀬川大常木谷、尾瀬・笠科川
小赤沢～大赤沢、足尾・庚申川本流、奥秩父・笛吹川東沢鶴冠谷右俣、奥利根・矢木
沢川ジロウシ沢支流四ノ沢、二口・�行沢カケス沢周遊ほか

◎すずらん通信 NO. 299 2006. 2 B5 4P 鈴蘭山の会

旭岳スキー場ほか

◎すずらん通信 NO. 300 2006. 3 B5 6P 鈴蘭山の会

冬山救助くんれん・谷川岳ほか

◎すずらん通信 NO. 301 2006. 4 B5 12P 鈴蘭山の会

笠ヶ岳～赤倉沢滑降、谷川・西黒沢、赤谷川源流～毛渡沢、雨飾山」、大渚山、前武尊
山・荒砥沢、安達太良山、会津駒ヶ岳ほか

◎すずらん通信 NO. 302 2006. 5 B5 24P 鈴蘭山の会

救助訓練、梅海新道、柳又谷スキー、レンゲ谷～赤男山～木地谷、燧ヶ岳、会津駒ヶ
岳、佐久の岩場、尾瀬・至仏山ほか

◎すずらん通信 NO. 303 2006. 6 B5 16P 鈴蘭山の会

立山、火打山、鹿島槍ヶ岳、双六岳ほか

◎すずらん通信 NO. 304 2006. 7 B5 5P 鈴蘭山の会

谷川・東黒沢～ウツボギ沢、丹沢・勘七ノ沢ほか

◎すずらん通信 NO. 305 2006. 8 B5 8P 鈴蘭山の会

奥多摩・小雲取谷、丹沢・原小屋沢ほか

◎逍遙 NO. 4 2005. 12 B5 P 逍遙渓稜会

丹沢・鐘沢、巻機・登川金山沢、谷川・ヒツゴ一沢、湯檜曽川高倉沢右俣、西穂高～

南岳・和賀・大荒川谷～和賀川、奥秩父・久渡川ナメラ沢、小雲取谷、飯豊・内ノ倉川七滝沢、谷川・万太郎谷、上信越・魚野川、足尾・蟬背沢～三沢、那須・苦土川大沢、谷川・仙ノ倉谷イイ沢、奥秩父・釜の沢、神流川金山沢、大菩薩・泉水谷おお黒茂谷、丹沢・伊勢沢、奥多摩・坊主谷、丹沢・玄倉川ヤブ沢～仲ノ沢ほか

◎逍遙 NO.5 2005.12 A4 P 逍遙渓稜会

奥多摩・越沢谷、丹沢・桶小屋沢、高尾・城山沢、丹沢・大山川、東吾野岩トレ、富士山、九鬼山、鳳凰三山ほか

◎逍遙 NO.6 2006.1 B5 P 逍遙渓稜会

丹沢・広沢寺、寺ノ沢、高尾・小下沢、丹沢・源次郎沢ほか

◎逍遙 NO.7 2006.2 B5 P 逍遙渓稜会

丹沢・分水嶺尾根、ボウズクリ沢、広沢寺、中川川笛子沢右俣、上越・巻機山井戸尾根、八丈島・三原山ほか

◎逍遙 NO.8 20

丹沢・セドの沢左俣、早戸川大杉沢～間子小屋沢、葛葉川滝ノ沢、四十八瀬川ミズヒ沢～鍋割沢、新茅ノ沢、奥多摩・小坂志川ウルシヶ沢右俣～左俣、中川川悪沢、下棚沢、小川谷、富士山、谷川岳、谷川・赤沢山ほか

◎逍遙 NO.9 2006.4 B5 P 逍遙渓稜会

丹沢・玄倉裸山沢、モミゾ沢、秩父・浦山川冠岩沢、奥多摩・小川谷滝谷、奥秩父・大洞川和名倉沢、丹沢・葛葉川本谷、世附川水ノ木沢、至仏山、奥多摩・シダクラ沢、丹沢・塔ノ岳～蛭ヶ岳～東海自然歩道ほか

◎逍遙 NO.10 2006.5 B5 P 逍遙渓稜会

奥秩父・大洞川樋谷ホラノ貝沢、丹沢・中川川大滝沢、足尾・丹平治沢～足口沢、奥武藏・川浦谷、丹沢・樅の木沢、谷川・湯檜曽川、奥秩父・入川真ノ沢ほか

◎逍遙 NO.11 2006.6 B5 P 逍遙渓稲会

奥秩父・一之瀬川竜喰谷、南ア・早川黒桂河内～二ノ右又～保利沢、奥多摩・小川谷滝谷、日光・深沢下タケ沢、足尾・浑川三重泉沢滝ノ沢右俣、三林班沢、奥多摩・盆地川石津窪、桐葉窪、奥秩父・乙女の沢、奥鬼怒・赤岩沢～魚沢、中ア・天竜川小黒沢ほか

会報

- ◎渓 年報 19 2006.3 B5 380P まほろば山岳会 浦和浪漫山岳会の頃の記録をまとめたもの。南会津・白戸川流域3本。会津朝日をめぐる山・2本。末丈ヶ岳をめぐる山と渓・3本。大殺山をめぐる渓・1本。枯木山をめぐる渓1本。丸山岳をめぐる渓・1本。平ヶ岳をめぐる渓・1本。奥利根の渓・3本。奥利根の山・3本。越後・金城山集中。池田知沙子追悼山行。下田川内の渓・4本。下田川内の山・3本。会越の渓・3本。黒又川流域の渓・2本。黒又川流域の山・1本。ほか山行一覧など
- ◎思い出の山これから山 2006.2 A4 304P 茨城県山岳連盟 創立50周年記念誌。50年の歩み、所属山岳会紹介ほか
- ◎カナディアン・ロック報告書 2006.5 66P 茨城県山岳連盟 創立50周年記念事業としてカナディアン・ロックに登山隊とトレッキング隊を派遣した報告書。

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

私めがこの編集後記を書くようになってから、謝ってばかりの様ですが今回も発行が遅れました、申し訳ありません。『発行』と書くつもりで『はっこう』を変換したら『発酵』とでてきました。パソコンってば意地悪です。はい、まさに会報を発酵させておりました。

会報を読み返してみると、去年は本当に雪が多かったんですね。そういえば去年はスキー場で雪崩も発生していましたね。それに引き換え今年は雪不足。山スキーはいつまで滑ることが出来るでしょうか。去年と今年を足して2で割ればみんなが幸せだったでしょうに、なかなかうまくはいきません。でも、そうです、今年は雪が少ないんです。もしかしたら今年は念願のあの場所へ、もしかしたら幻のあそこも登れるかもしれません。チャンスを逃さないように準備はしっかりとしておくなくっちゃ。

(S子)



季報〔R & V〕第60、61号 発行 2007年春

発行人：本図一統

発行所：ACCJ-茨城

編集者：本図一統、渡辺聰子

印刷所：やまと印刷





岩壁、沢、冬山のクライミング集団